



ピーブルズ・プラン研究所運営委員の武藤さん（写真向かって左）と本会共同代表の吉川さん。二人が今年共に80歳を迎えられたことを祝う会が、10月29日、東京で開かれました。ベ平連運動とともにしながら、若いころは顔を合わせると大喧嘩になったというお二人、久しぶりの対談の一端をご紹介します。

学生時代の出会い

武藤 二人の交流史ということだけけど、出会った時は19歳と20歳。学年は吉川さんのほうが一つ上だった。僕は人の誕生日はぜんぜん覚えないうだけけど、吉川さんの誕生日は知ってるんです。1931年の3月14日。1954年の3月14日に、全学連など活動家が大量捕まる事件があつて、僕も吉川君も警視庁に留置される。そこで、岩間っていう公

安刑事にねちねち取調べられるんですが、この刑事が、理論闘争のつもりか、ロシア革命が起こったときマルクスはそんなはずないと驚いたそうじゃないか、などと言った。ロシア革命の1917年、マルクスはとくに死んでいる。というわけで、岩間氏の理論闘争は成功しなかった。それがあつたので、後でマルクスの命日をしらべたらそれが何と3月14日。で、よけい吉川誕生日は忘れられぬ日になりました。僕が大学に入った1950年は朝鮮戦争前夜の感じがキャンパスにみなぎっていた。僕は高校では一時右翼を張っていたけれど、理屈好きの唯物論者の友達との論争に負けて、転向しかかかっていました。でも、大学に入学して、心理学研究会に入ろうと部室を覗いてみると、ねずみばかり扱っていて人間がなくて、面白くない、そこで社会学研究会を作ろうと張り紙をしたら、現れたのが吉川さんだった。もう一人は、富永健一。この人は東大の社会学の教授になりました。吉川さんは当時日本文化研究会に属していて、すごい趣味人。話もお茶もできる。落語の「じゅげむじゅげむ」このすりきれ・・・」を最後まで言える。もう言えない？

吉川 言えるよ。

武藤 まったく私の文化とはちがうんで驚異的だったですね。正月には和服で床の間の前に正座して写真撮るような人でした。1953年に朝鮮戦争が終わり、1954年ごろから社会の雰囲気占領が終わってほっ

としたような感じになっていったと思います。50年代のことは、証言者が年々少なくなってしまうのに、まだちゃんと研究されていないですね。1951年に共産党は、日本は農地改革は見せかけで、封建遺制が支配しているといった奇妙な綱領をきめて、山林地主が支配している山村から武装闘争をするとして、山村工作隊を組織した。僕はそれには入らなかったけれど、この綱領を実証するためとして組織された農村調査に加わった。吉川さんも富永さんも加わった。50年の12月末。三多摩の山村。一夜は小学校の体育館で寝ましたが、猛烈に寒い。積んであつた古畳を掛け布団代わりにしたけど、重くて寝られない。これはいったい政治運動なのか冒険クラブなのかわからないといった感じでしたね。僕らは非常に不毛な時代に知り合つた。そのあと不毛でない時代、活動にやりがいのある時代もありました。吉川さんにはそれはベ平連の時代ですね。

ベ平連の前に僕は平和委員会にいた吉川さんと一緒に仕事をしています。僕は原水協の国際部について、何回も原水禁世界大会を一緒にやりました。しかしその後、中ソ論争がらみの内部対立が起こり、運動は荒れに荒れます。その中で、ついに吉川さんは堂々たる抗議声明を出して平和委員会をやめるんですね。僕はその声明を英語に翻訳して世界中にばらまくお手伝いをしました。

こうして60年たち、いま並んで座るのは、

ほんとうに不思議な縁ですね。吉川さんといつていいのか、吉川君といつていいのか、おい吉川、というのか、いまだによくわからない、そういう不思議な関係であります。

運動は「失敗」だったのだろうか

僕は1950年代、日本の反体制の民衆運動が大きい敗北を喫して、それが60年後の今も縛っていることを痛感しています。対米関係です。サンフランシスコ講和と安保条約への反対運動は実を結ばなかった。僕は「国恥記念日」と銘打った52年4月28日、全都学生総決起大会で、来なかった議長の下りに議長をやった。それもあつて僕は退学処分になりました。あれから60年近くたつが、僕は今日の日米関係はそこで決まってしまったと思う。全面講和を要求する運動はかなり広汎に広がったが、腰砕けになった。民衆運動の政治的な力量というものがどんなに大切か、それを思い知りました。それは原発・沖縄・TPPという社会全体の選択を要求する課題に向き合つていまま、あらためて考える必要があると思うんですね。

アメリカの支配も宿命的だったとは考えるべきではない。でも当時、ユーゴに匹敵する政治の力、すなわち民衆の力が日本には欠如していた。岩波文化人は一所懸命やってたし、労働運動も、学生も一所懸命取り組んでいた。しかしそれを一つの政治力にしていくことができなかった。政治力というのは拒否する力です。その拒否力を作ることができなかった。それが60年も僕たちを縛ってる。こゝろ言わなければならぬのはとても残念ですね。しかしこの課題をこなせるかどうか、いま再び試されている、そういう時期に入っている、そう思います。これからの100年を考えると、国内に、また世界にいかにしてその政治力を作っていくかというのは、巨大な課題ですね。われわれは先がないので考えてもしょうがない。でも考えないわけにもいかなない、問題は考えるところなんかやりたくなくなるということですね(笑)。

吉川 武藤さんが話した寒かった農村調査のことはとても忘れませんよ。このときの私たちの話は、作家のきだみのるの『気違い部落紳士録』に「山村工作隊異変」として出てきてるんですよ。私も前に自分の活動というものには失敗だったなあと書いたことがあります。でも、つまらなかつたかというところ、そうではないんですね。面白かつたな、もう一度やるかといわれたらやるのではないかな、と思います。悪い人生ではなかつたんじゃないかと。生まれたのは満州事変の年で、それから何度戦争を経験したか、そして50年の朝鮮戦争以来、いつたい何回戦争反対をやつてきたか、こんなに戦争と付き合つた時代の人間もあんまりいないんじゃないかと思ひます。私も4月28日の「国恥記念日」に学生のストライキの議長をやつて退学になるんですが、反安保闘争は実はそこからずっと続いているんですね。けれども3・11以降全国に広がりがつあるこの脱原発の大きなうねりの中で、日米安保体制との結びつきを問う議論は非常に少ないですね。安保に言及すれば政治的になり孤立するのでは、それはまずいと思う人も多いのだと思います。この武藤論文(『潜在的核保有と戦後国家―フクシマ地点からの総括』社会評論社)にはこの二つが密接不可分なものだということが、きつちり書かれてます。すばらしい本で、ぜひ読んでいただきたい。われわれの50年以上の活動がこれからよくなる可能性がある、ぜひこれはやってみないなあと思っています。といつても私は体がもうだめなことは確かなので、会うといや元氣じゃないかと期待されるのは大変困ります。

この会には北海道から、同じく80歳の花崎皋平さんも駆けつけてくれました。作家の彦坂諦さんの「戦後の運動の失敗の歴史が今日の日本を作つてしまったけれど、80年生きてきてなお、失敗を口にされ新しく生きようとされている3人はすばらしい。」の言葉と共に、あわせて240歳の三人のゆるぎない背中に、会場から大きな拍手が送られました。

(まとめ 阿部めぐみ/本誌編集委員、写真 大木茂)